

# Nコン2019 高等学校の部 課題曲

「僕が僕を見ている」 作曲 岩崎 太整さん(作曲家)

Q 初めてNコン高等学校の部の課題曲の作曲依頼を受けて、どう思った？

岩崎: すごく悩みましたね。すごく悩んだのは、そういう話をいただいた時に、(課題曲)すべて、いま聴けるものを、すべて聴いたんですね。もちろん昔のやつで、なかなか聴けないものもあると思うんですけど、用意していただいたもの、譜面、手に入るものは自分で集めてみて・・・やってみると(聴いてみると)、やっぱり。すごく個人的な感想にもなるんですけど、高校生(の課題曲の印象)は「突然変わるな」という印象がありました。

もちろん小学校、中学校、全部、(課題曲を)聴いていったんですけど、高校生になったとたんに急に、僕は一応プロの演奏家と呼ばれる人たちと関わることも多いんですけど、その人たちと遜色ないぐらいのクオリティーと情熱を持っているように(演奏を)聴いて、やめようかなとちょっと思うぐらい、本当にすばらしくて、どの曲も。これをやるとなると、相当大変だになってというのが最初の印象でしたね。

でもやっぱりやってみたいと思ったのは、特に高校生の歌、Nコンの課題曲というのは、すごく面白いのは、歌詞に曲がつくのではなくて、もともとある詩に音楽をつけるというか、歌を想定してないような詩に曲をつける面白さみたいなのが存在していて、そういうものを彼ら(高校生)と一緒に歌い込んでいくという過程がすごく楽しそうだなと思ったので、これはやってみたいなと思いましたね。

だから、本当に(高校生を)子ども扱いしちゃだめだな、と。もちろん(参考演奏の合唱団の)練習を見ても、彼らはプロフェッショナルだという印象を持ったので。そして、その人たち(高校生)がこれだけ長い期間かけて歌うっていうことになると、こっちも生半可な気持ちじゃできないだろうし、僕は合唱畑の人間ではないので。

やっぱり、いちばん大事にしたのは、長い時間をかけるに値するような曲が作れたらいいなというふうに(思いました)。それは作詞をした川村元気さんも同じだと思うんですけど、一つのものに打ち込むってことのスバラしさ、それで全国の高校生たちが歌ってくれるということの重みと、そういうものがいちばん自分の中では楽しみでもあり、重圧でもあったなというふうには思います。

Q 川村元気さんの歌詞を読んだ印象は？

岩崎: 最初見た時に、彼は映画のプロデューサーが一応、本職で、いまはいろんなことをされてますが、「場面がすごく転換するな」って(感じました)。僕も一応、そういう仕事をする人が多いので、もちろんさっき言った歌詞ではなく、歌詞っていろんな歌詞があるんですけど、一人称で自分の心情を吐露するようなものではなくて、ある種のストーリー性と、視点の切り替えみたいなものを僕は最初に感じて、なるほど〜と思って。だから、ちょっと思っていたものとは違いましたね。僕は(川村さんから)どういうふうなものが来るのかも分からなかったんですけど、「なるほどストーリーだ」と受け取って、これをどうしようかなというふうに考えましたね。

Q これまで一緒にお仕事をしてきた川村さんの書く歌詞、内容はイメージ通りだった？

岩崎: いや、でも、僕は一緒に仕事をすることはあるんですけど、立場が違うので、初めてなんですね、そういう意味では。彼は映画プロデューサーとして僕とつきあうことはあっても、作詞家として僕とつきあうことは当然、初めてなので、僕もどんなもの(歌詞)が来るか全然、想像がつかなかった。いわゆる作家どうしでつきあうってことがいままでないので、だから、(川村さんのことを)知っているけど知らない状態だったので、新鮮でした。

Q 「死んでいるんだ」という歌詞をどう受け止めた？

岩崎： 「死」というものは、たぶんあの歌詞の中では、僕は表現の1つにしかすぎないと思っていて、ある種のファンタジーというか、ファンタジーの、別にファンタジーの物語があったら、例えば死んで、次の世界に転生するようなものなあって山ほどあるという。別にそれは「死」じゃなくても、例えば違う世界に行くファンタジーの話とか、そういうものに近いのかなというふうには。

だから、「死」を「死」とは、僕はあまりとらえなかったですね。ある種、きっかけがあって、違う世界に行く話。違う世界で自分がまた新しく生まれるような話というふうになっていた。で、「翔ぶ」っていうテーマ(Nコン2019課題曲のテーマ)はもちろん知っていたんですけど、それにずれているような感覚はなかったですね。

曲も一応、僕の中では、本当に空中から見ている瞬間とか、クラスの人たちとかに変わっていて、また自分がどんどん違う世界に飛んでいくような。そして、最後は雲間を分け入って自分が違う世界に行くように作られた印象はあるので、別に「死」というのは意識しませんでした。

Q 最後に向かうのは【希望】？

岩崎： 全部、シーンを変えて、テンポも調性も変えたので、そのシーンを音楽でどう表現するかということには、そこ(最後の部分)をがらっと変えようというふうにはしました。まさに雲間から抜けるような、で、新しい調と新しいメロディーが登場するっていうのは(意識しました)。

あとは、「新しい朝が来た」っていうところが、本当に彼らが新しい朝が来たと思ってくれるように歌ってもらえば、できればそういうことができればいいかなというふうには思いました。

ひとつ、彼の詩の中に、【無常観】みたいなものを感じたんですね。それは「平家物語」にあるような、祇園精舎の鐘の声っていう、ああいう【無常観】。それは悪い【無常観】ではなくて、ある種の【無常観】から別の世界に飛んでいくような、希望の世界に行くっていうところを、すごく感じたという。そこをうまく表現、音楽的にもできればいいなとは思いました。

Q 各場面ごとのねらいは？

岩崎： 僕が想定したのは、曲には6シーン、6シークエンス存在していて、(曲の)頭が一人称、「みんなが・・・」っていうところがまた別のシーン。ある主人公が1つ動く。運動を起こして動いている。そこから急激にクラスメートのほうにフォーカスされる。またそこから、「僕は僕の・・・」っていう主題のところ、自分がまた空中に浮いていて違う世界に向けていく。で、1つ雲間のようなところをへて、新しい世界に行くっていう(のが全体のイメージ)。

参考にしたっていうのもおこがましいんですけど、例えば「喜びの歌」ってありますよね。あれ、第九ですけど。あれの最後の、4楽章の生まれ方、メロディーの生まれ方みたいなものは、ヒントとしてはひとつ自分の中にあったという。いろんな主題を否定していった、それが嵐に巻き込まれていった〜みたいな、あの(第九の)手法をどこかで自分の中で踏襲したような部分はありますね。新しい希望の部分、という意味では。

Q 「Rap」パート、誕生のきっかけは？

岩崎： 飲み屋で決まったっていうか(笑)。本当に彼の最初に(歌詞を)もらった時に、あのパートを見た時に、何の疑問もなく、これはそういうことにしようというふうには自分では。で、ある日、会った時に、「これ、ラップにしたいんだけど」っていう話をしたら、「そう思ってた」というので、じゃあそうしよう。全く。

だから、最初からラップをお互いしよう、ってことではなく、歌詞を見て、僕はそれに対して「リズムをつけたい。節ではなく、リズムで見せたいんだ、ここは」っていうのがどこかにあったんでしょね。それを話したら、それでいこうよっていうことになった。なので、そこには全然、本当に何の相談もなかったですね。本当に自然でした。別にそこに、気が合うかどうか、それは分からないぐらい自然という。あの歌詞がそうさせたっていうところもあるでしょうね。

Q 全国の高校生たちにどう「Rap」の部分と向き合ってほしい？

岩崎： ひとつの方法論としては、演劇のように役を変えて歌えばいいかなというふうには思います。

もちろん歌を上手に歌おうっていうのは合唱の1つの大きなテーマではあると思うんですけど、「Rap」のパートに関しては、歌がうまいっていう、「うまく譜面通りに歌う」っていうことは、決して正解ではないと思うんですね。ある種の役柄を演じるといふか、周りの友達たちを演じる側になるので、譜面どおりきっちり歌おう、きっちり拍を取ろうとかいうことは、あんまり考えなくてもいいかな、と。

それよりも、もっと楽しげだったり、そこに生き生きと存在するような役として歌ってもらえると、もしかしたら、オリジナルティーが出るのかなというふうに思いますね。そういうところを意識して歌えばいいんじゃないかなと思いますけど。

Q 後半の盛り上がり、どう歌う？

岩崎： 特に後半部分に関しては、個人的にすごく、歌っていると高揚するような曲にしたいなと思っていて、それがどんでん、「僕は僕を見ている」から「新しい朝が来た」まで、気持ちに何か表現があるとすれば、ずっとグレッションドしていくような。もちろんInterludeのところはちょっと落ちるんですけど。だから、歌っていて気持ちいいようなものにしたようなつもりがあるので、そういうところを楽しみながらやってもらえるっていうのはいいかなと思います。

Q 参考演奏の合唱団が歌っている様子を見て、どう思った？

岩崎： 本当に見たことのない…僕は作り手なんですけど、やっぱり作り手じゃないなっていうふうに正直なところ思った。というのは、彼らが歌うと僕が想定したものの何倍もすごくなって返ってきちゃうので、そういうふうには作っているけど、真実の姿なんて全然、見れてなかったなという。一応そういうふうになってくれ！というふうにして作ってはいるんですけど、これが全国の高校生たちに歌ってもらおうっていうのは、もちろん楽しみなんだけど、ちょっと怖くもありますよね。「なんだこの曲」っていうのはあるかもしれない～可能性もあるので、僕も、例えば（課題曲の）発表だったり、それがだんだん浸透してって、これが課題曲です、と練習していく様子を、僕もドキドキするだろうなという。Nコンが始まって終わるまでは、同じような気分なんだろうなと。もちろん練習する側の人たちはすごく時間を使うので、それ以上のことは絶対ないんですけど、でもやっぱり同じような気持ちですかね。

Q 高校生たちをどう見守っていく？

岩崎： 彼ら（高校生）に見合うような曲になっていればいいかなと、それだけですね。僕がどうこうとかいうのは全然なくて、歌っている高校生たちが、高校生なので、もちろん何年生とかいうのはあると思うんですけど、その1年ってすごく大事だったような、個人的にも気持ちがあるんですね。そこを費やすのに、「あの時の曲って嫌だったな」みたいなのは避けたいなっていうのも個人的にはあって、そこに本当に見合うような曲になって、僕が想像もしないようなすごい形でたぶん返ってくるような気はしているの、そうやっていればいいなというふうな願いとともに、10月まで過ごすだろうなというふうに思います。